

犬山のまちづくり 市民活動・地域活動インタビュー

Vol.3 羽黒地区コミュニティ推進協議会

会長 横井 耕市さん



自分たちの まちは 自分たちで

犬山市の中心に位置し、五条川が流れ、歴史的な文化遺産が残る羽黒地区。ここで平成 11 年にコミュニティ推進協議会を立ち上げ、現在も会長として組織の先頭に立ち、羽黒の地域づくりを牽引されているのが、横井耕市さんです。経営者としてもご活躍されている傍ら、そのノウハウやネットワークを活かし、地域の資源を生かした数々の事業を実施されています。

今回地域活動を考えるにあたり、これまでの歴史と経験、また今後の展望について、お話を伺いました。

— 「地域活動」や「地域づくり」について、どのようにお考えですか？

横井： 羽黒地区は、かつて羽黒村として栄えましたが、犬山町と合併し、市制を取る選択をしました。ところが、犬山地区にはお城と年中行事がありますが、羽黒では桶屋等が無くなり、段々と寂しくなっていた。そこで年に一回、夏祭りでもやろうというのが、私たち羽黒コミュニティ結成のきっかけです。

それから、「自分たちのまちは自分たちで」という考え方で、たくさんの事業を実施してきました。まず身近な小学校との連携を考え、「食」の重要性から、米作りの体験を現在も続けています。春の田起こしから、田植え、水の管理、施肥、秋の稲刈り、脱穀まで、四季を通じた作業を実施、体験し、冬には作った米で餅つきを行い、食べるまでやります。この新型コロナウイルスの影響で中止も考えましたが、学校から継続してほしいとの要望を受け、今年も田起こしをしました。そろそろ田植えもやります。

五条川についても羽黒の大切な資源として、堤防の草刈り、花植えを行い、桜の時期は夜間のライトアップを行っています。周辺企業の従業員は多国籍の方が多く、憩いの場として、多言語で賑わっています。女性部会では、地域住民の高齢化を受け、運動や歌を歌うサロンを地域のあちこちの集会場などで実施したり、羽黒音頭の練習会を実施したりと、活躍してくれています。



ただ忘れもしませんが、初めての夏祭りの準備で、三日前から取り掛かる予定でしたが、集合時間になっても誰ひとり人が集まってこない。仕方がないので一人でやっている、妻が様子を見に来てくれ、自分の会社の従業員 20 名くらいも手伝いに来てくれました。準備二日目に、櫓を組み、竹を切ってきて吹き流しを掲げると、「お！なんか始まった！」と人が集まり始め、最終的に多くの人が手伝ってくれました。これには、自分たちも酔いしれました。それから、毎年続けていくうち、ガールスカウトや中学校の吹奏楽、消防団など、参加の輪が広がりました。まずやってみて、背中を見せれば、きっと誰かが力を発揮してくれます。

別の話になりますが、昔、立山町と市の交流事業があって、立山の雪を大型トラック 13 台でするすみ広場へ運ぶ事業があったんです。地域にも協力してもらおうということで、コミュニティも参加しましたが、その時の市の職員が優先権を持ってしまい、私たちに向かって、「ここはこちらでやるので、手は出さずに、見といてください」と言われたんです。自分たちの企画した形に、思いがあったんでしょう。この発言を聞き、途中で帰ってしまった地域の人もあります。結果的には、多くの人が集まり、事業は成功したと思いますが、これは地域づくりにおいて、とても危険な発言なんです。どうしても企画立案した人や組織の思いが強すぎると、意図したとおり進まない場合に、周困とトラブルが起きてしまう。準備の段階からの、プロセスも重要です。

今回新型コロナウイルスの影響で、コミュニティの総会を書面表決で実施しましたが、一通だけ意見書が届きました。その質問一つずつに丁寧に回答したところ、理解が得られました。やはりここを疎かにしてはいけません。地域の活動では、限られた区域内の地域住民全員と交流し、つながります。一人一人の小さな意見を大切にすることを、私はいつも心掛けています。



—今後の展望を教えてください。

横井： 元々、羽黒まちづくり委員会というものがあり、学校、市議会議員、町会長、コミュニティで構成し、羽黒駅前のまちづくりを議論してきましたが、時が経ち、今は羽黒城址の竹林の整備をしています。大正期には碑が整備され、現在に至っていますが、竹が生い茂り、活用に至っていません。そこで、羽黒の憩いの場にしようと、コミュニティの一大事業として現在計画しているところです。

城下町と羽黒に違いがあるように、地域差は必ず存在します。それを超えて、地域のエネルギーを生み出せるようにしていきたい。しっかり目的を持って活動していこうと考えています。